

大学での少人数教育を契機とした景観まちづくりの実践*

Practice for Community Design through Small Group Lessons at University*

星野裕司**・小林一郎***・毛利洋子****・永村景子*****

By Yuji HOSHINO**・Ichiro KOBAYASHI***・Youko MOURI****・Keiko NAGAMURA*****

1. はじめに

熊本市から阿蘇に向かう手前に位置する大津町は、加藤清正以来の大津街道の宿場町として栄えた歴史と、阿蘇の眺望や白川という豊かな河川を有した街である一方、阿蘇に行く途中に通る街程度のイメージしか一般の人たちに残していない。大津町の市民からまちづくりに関する相談を受けた著者らは、まず学部3年生に対する少人数教育の一環として参加することからプロジェクトをスタートさせ、調査から意見交換、成果発表を通じて市民とのコミュニケーションを深めていった。その結果、講義終了後にも市民と協働してサインづくりなどの実践に展開させている。そこで本稿では、この実践に関する報告と考察を行う。

2. 活動の概要

(1) 大津町について

大津町は熊本市の東方約19km、阿蘇山との中間に位置しており、国道57号（長崎～雲仙～大分）と国道325号（久留米～阿蘇～延岡）が縦・横断し、熊本空港、九州縦貫自動車道熊本ICに近く、交通条件は恵まれている。また、人口は約28,000人である。

歴史的に見ると、天正15（1588）年加藤清正が肥後の領主として入国、大津上井手、下井手の開さくに着手し、没後、細川氏により完成し、一大穀倉地帯となった。江戸期には細川藩参勤交代の宿場町となり、肥後と豊後を結ぶ豊後街道の要衝として栄え、近隣52村余りを統轄する藩役所大津手永会所が設けられ、政治・経済・文化の中心となっていた。

*キーワード：景観、公園・緑地、まちづくり、教育

**正員，工博，熊本大学大学院自然科学研究科

(熊本市黒髪2-39-1, TEL096-342-3602,

FAX096-342-3507)

***正員，工博，熊本大学大学院自然科学研究科

****学生員，工修，熊本大学大学院自然科学研究科

*****学生員，熊本大学大学院自然科学研究科



図-1 大津町の位置

(2) 社会基盤設計演習について

熊本大学では、景観デザインやまちづくりなどの教育に関して、「歴史と景観」（観察する，1年後期），「空間設計論」（対話する，2年前期），「構造設計論」（工夫する，2年後期），そして、「社会基盤設計演習」（創造する，3年前期）を連携させることによって段階的に行っている（図-2）。最終段階である「社会基盤設計演習」は、多グループで行う少人数教育であり、筆者らのグループには8名の学生が参加した。筆者らは、学生に現実の課題を与え、その成果を市民にプレゼンテーションするという社会的な活動を学生に提供することを、この講義の目標としている。2005年度のテーマが「大津町まちづくり計画」であり、過去2年は、04年度に小国町に残る廃線跡を活用した「宮原線跡活用プロジェクト」、03年度が「三角海峡活用プロジェクト」である。

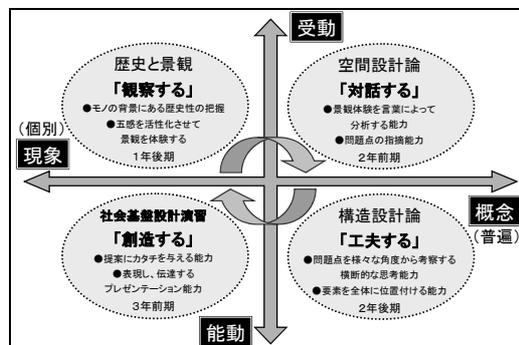


図-2 社会基盤設計演習の位置づけ

(3) 活動の流れ

本稿で報告する活動の流れを表-1に示す。この表からわかるように、この活動には3つの時期がある。す

なわち、地元住民の一人（土木コンサルタントの経営者）が、町道の景観整備業務を契機に、まちづくりのアイデアをはぐくむ時期、大学での少人数教育を展開する時期、大学と住民が協力して、街中のサインを制作する時期である。最初の時期において大切なことは、台風によって倒れた杉を、大津町商工会が熊本県から譲り受けたことであろう。この杉は、豊後街道の杉並木として植えられたもので、樹齢は400年以上と推定される。このような具体的なモチーフを得られたことが、活動が持続する一つの要因になったと考えられる。次の時期に移る契機には、住民から筆者らへのまちづくりに関する相談があった。そこで筆者らは、前述した「社会基盤設計演習」の課題として取り組むこととした。この理由は、講義の実績があると同時に当年度のテーマを探していたこと、まちづくりにおいては住民やアドバイザーが忌憚なく議論できる場を作ることが肝要であり、講義の一環としての活動は、その場づくりに最適であると判断したことである。その後、講義が終了してもこの活動は終わらず、先の木材を活用したサインづくりへと展開していくが、それらについては次章以降に詳述する。

表－1 活動スケジュール

2004.	6月	町道室塘町線景観整備設計(～10月末)
	9.07	台風18号により倒れた大津街道の倒木杉を大津商工会が譲り受
	10.29	豊後街道地域振興会発足
2005.	3.15	「川を活かした下町のまちづくり」企画提出
	3.27	第1回大津町現地調査、関係者初顔合わせ
	4.22	演習授業開始
	23	現地調査
	5.01	大津ものづくり会発足
	5月	現地調査結果分析、大津町情報収集
	6月	方向性の検討、町の様子分析
	6.25	意見交換会(大津愛唱歌披露コンサート内で、大津町分析発表)
	7.01	まちづくり提案の方向性決定
	08	提案に向けた再調査
	9.20	模型製作開始
	10.03	まちづくり提案検討開始
	21	第1回WS(現況模型説明、意見交換会)
	29	パネル、提案模型完成
30	工学部祭(学内で成果報告会)	
2006.	11.09	まちづくり提案資料作成開始
	18	第2回WS(まちづくり提案発表、社会基盤設計演習終了)
	12.12	提案模型等展示(大津町役場、～22日)
	16	サイン用杉材視察
	16	大津町懇談会(九州建コン主催)
	1.17	豊後街道視察
	2.25	現地調査
3.04	サイン形状打合せ	
4月	サイン製作	
4.23	「つつじ祭り」会場内に模型やサインを展示	

3. 社会基盤設計演習での活動

表－1からわかるように、この「社会基盤設計演習」での活動も大きく3期に分かれる。調査の時期、提案準備の時期、提案の時期である。まず調査の時期では、阿蘇の入口という地理的な条件から知名度はあるが、大津町の魅力そのものに関しては何も知らないという問題点が確認され、それを発見するために入念な現地調査が繰り返された。これが可能となったのは、大学と大津町が車で30分という近距離にあるということが大きい。調査の成果は、2005年6月25日の意見交換会で発表された

(写真－1)。これは「大津町の愛唱歌を水車物語で聞く小さなコンサート」というイベントの前座として催されたものである。この会によって住民の声を聞いた学生たちは、対象を絞り、具体的な提案に入っていく。選ばれた対象地は、住民の意向を尊重し、街角広場を中心としたまちなかの提案と、町の南部を流れる白川に面した下町という地区の河川緑地の提案であった。この時期は夏休みを挟んでいるために、作業の進捗が遅れたが、提案をまとめる前に再度、現況模型を囲んでのWSを開催し、住民の意見を収集している(写真－2)。その後、提案内容を詰め、模型などの表現を使用して第2回WSに提示した(写真－3)。



写真－1 意見交換会の様子



写真－2 第1回WSの様子



写真－3 街角広場・河川緑地の提案模型

このWSにおいて、最も住民の関心を呼んだ提案は、街角広場との関連で示した「こでかけまっぷ」と、それに伴う通りの名付けである。これは、大津町の街中を活用する方策として、ちょっとしたお出かけという意味の「こでかけ」というテーマを設定し、そのこでかけルートおよび、それを構成するいくつかの道に名前をつけるという提案である。この提案が関心を呼んだ理由を考察すると、模型で提示したような具体的な空間は、様々な問題点に議論が集中するが、通りに愛称を付けるという行為は、住民においても地域の魅力や歴史を再発見させ

る契機ともなり、また、住民たちが行政に頼らず行える活動として認識されたからではないかと考えられる。

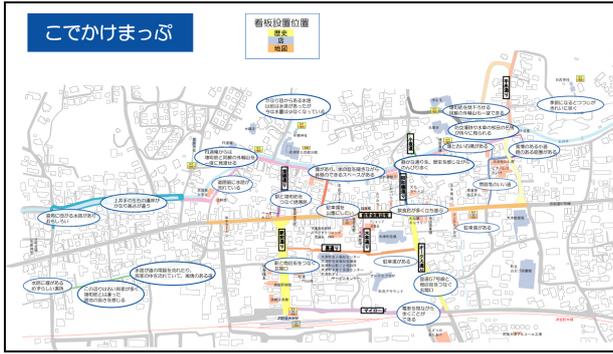


図-3 ここでかけマップ

4. サインづくりへの展開

社会基盤設計演習での活動は、2005年11月に終了したが、その後も大津町役場での提案模型等の展示（12月12～22日）や九州建設コンサルタント協会主催の大津町懇談会（16日）の開催など、まちづくり活動は継続する。ここから具体化していくのがサインづくりである。これは、社会基盤設計演習の成果である通りの名付け活動と、前述した倒木のリサイクル活動を融合させたものである。活動体制は、住民が教育活動中に発足させた大津ものづくり会が全体のコーディネートを行い、筆者らが所属する研究室がデザインを、大津町商工会が資金の援助を、加工や組立作業の支援を熊本県建築士会東支部が行うというものであった。また、制作作業には、少人数教育に参加した学生が、ボランティアであたっている。筆者らが、サインのデザインにおいてテーマとした点を以下に示す。

- ・ 樹齢400年以上である迫力を、できるだけ素直に表現すること
- ・ リサイクル材であり、かつ、作業もボランティアであることから、できるだけ贅沢な表現を行うこと
- ・ 通りのサインとして機能するだけでなく、掲示板としてや、花を飾るなど、住民が使い愛着を持つことのできるものとする

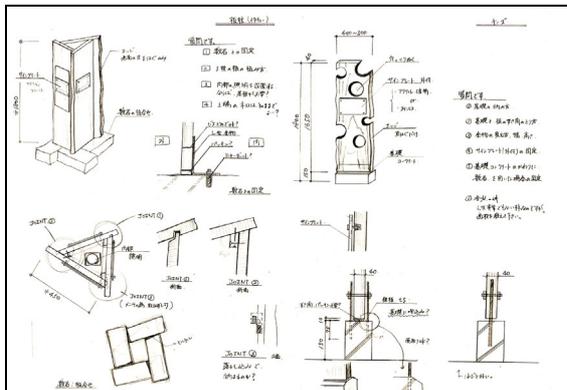


図-3 サインのスタディ

以上の考え方に基づき、提案した形状は、3枚の板を三角形に組み合わせ、ソーラーパネルによって内部に照明を組み込んだものと、2枚の板をずらして立て、前面の板には、丸い穴を空けるなどの遊びを施した2種類である。スタディ図を図-3に示す。このようなデザイン案に基づき、接続のディテールなど建築士会のアドバイスによって、実際に制作しながら決定していった（写真-4）。結局、三角柱タイプを1基、2枚板タイプを2基作成し、2006年4月23日に開催された大津町でのつつじ祭に展示及び現場設置が行われた（写真-5、6）。



写真-4 サイン作成の様子



写真-5 つつじ祭での展示の様子



写真-6 現場に設置した様子

この活動を考察すると、重要な点は2点ある。一つは、ここから大津町商工会の積極的な参加が見られるようになったことである。社会基盤設計演習の活動時には、大津町役場と商工会はオブザーバー的な参加だったが、サインづくりから商工会が資金援助などのバックアップを

行うようになった。これは、この活動を円滑に進めるためにも必要なことであるが、それ以上に、教育からスタートした活動が地元で根付いた広がりのあるものになる契機となったことが重要であると考ええる。もう一つは、サイン設置の場所についてである。写真-6は、この活動の契機となった町道室塘町線景観整備によって実現された広場に設置した写真である。このような場所が、サイン設置には最適であると考えられるが、実際このような場所は少数である。これはすなわち、住民が愛着を持って、かつ目につくような小さな場所（街のスキマ）が、現在の都市から失われている現象の一つだと考えられよう。住民主体のまちづくりの一つのアプローチとして、このような魅力的なスキマを探していくことが有効なのではないだろうか。

5. まとめ

この章では、報告してきた活動全体について考察を行いたい。つじ祭において、学生のまちづくり活動への参加および制作したサインに関して住民にアンケートを行った。全体で115名からのアンケートを収集した。詳細については講演時に発表するが、おおよそ、両活動について好印象を持たれていた。

ふたつの活動を横軸に主体（行政／住民）を、縦軸に時間（将来／現在）を取り、整理したものが図-4である。この整理によって、以下のことが理解される。

- ・ 少人数教育による提案は、ともに街の将来像を示すものであったこと
- ・ 関心と呼んだ「こでかけまっぷ」や通りの名付けは、住民主体によって可能な活動であり、それが現在における住民の具体的な活動として展開されたこと
- ・ 行政による将来を見据えた活動（本来の社会基盤整備）に展開するためには、行政による現在の活動が課題となること

また、図-5は、大学、学生、住民というこの活動の主体となった3者の関係を図示したものである。この活動は、まず大学での少人数教育のテーマとなることによって、大学および住民による、学生に対する広義の教育という形態ではじまった。すなわち「ひとづくり」である。そこで育てられるひとが、いわば第三者的な学生であったことが、住民の主体的な参加を自然に促す要因になっていたのではないかと考えられる。一方、サインという「ものづくり」のフェイズにおいては、住民が中心となって、大学と学生が支援するという関係となる。このように中心をずらしつつ活動を継続することによって、大学と学生の間では教育、学生と住民の間では提供、住民と大学の間では協力という関係が築かれ、それらが三

者の協働というかたちになっていったのではないかと考えられる。先の活動の展開で述べたように、今後、この協働の中にどのように行政を引き込んでいくかが課題となるであろう。

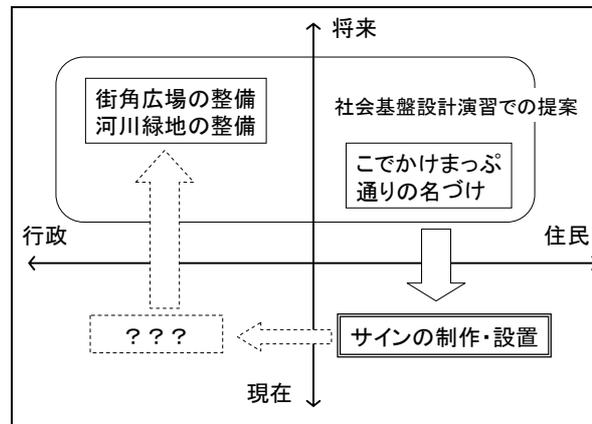


図-4 活動の展開

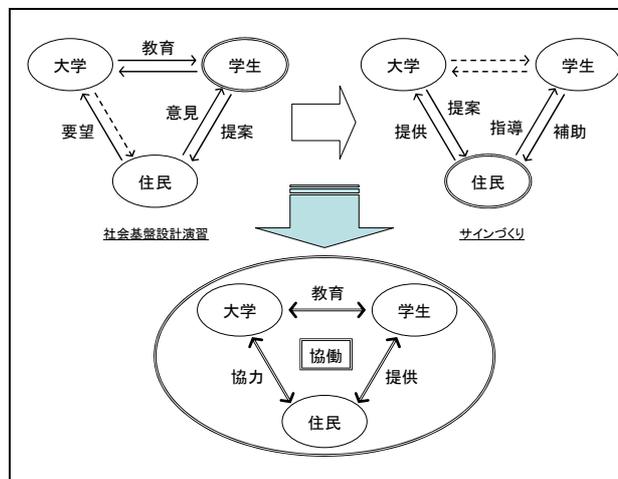


図-5 協働のかたち

6. おわりに

本稿では、大津町でのまちづくり活動の報告と考察を行った。最後に特徴をまとめておきたい。

- ・ 大学が参加しまちづくりが本格化する前の準備があったこと。特に、倒木の木材という具体物の存在が大きい
- ・ 教育活動の一貫として、街の将来像を示す提案を行い、その中でも住民によってすぐにでも着手できる提案が実現された
- ・ まちづくりに対して、まず教育によるひとづくりから開始し、ものづくりへと展開していったこと

謝辞

本稿をまとめるにあたって、「大津ものづくりの会」代表の中村秀樹氏には、大変お世話になりました。心より御礼申し上げます。